

身につける「評価能力」で得られる大切な「信頼」

内山 充

医療は信頼で成立する。その信頼は人（医療職）によって支えられる。薬剤師も勿論例外ではなく、常に医療の信頼性を支える役割を担っていることを忘れてはならない。

人を育てるのは、卒前、卒後および生涯を通じた一連の学習（研修）であり、特に大学教育の10倍以上の年月を通じて行われる「生涯研修」が、国民の求める人材を作り、薬剤師の社会的価値を決めているといえる。

優れた生涯学習で身についた職能は、日常業務での実践的行為に反映されるとともに、適切な「資格称号（Credentials）」により保証される。

したがって、生涯学習（研修）の質と、資格称号の評価が、適正・公明に行われることが、薬剤師の業務に対する信頼性を高め、わが国の質の高い医療環境育成に貢献するための基であろう。

生涯研修の積み重ねによって身につく専門職としての能力の中で、最も価値のあるものは何か、それは、『専門職倫理に則り、考え、評価し、行動する能力』である。「目的を見誤らず、将来への影響を予測して、今取るべき最適の結論を出す」、いわゆる「評価科学」の能力である。

「評価科学」は、新規性を追及する「基礎科学」とも、有用性に価値を求める「応用科学」とも異なる価値観を有している。すなわち、「正しい判断」が最も貴重である。状況に応じて、その都度正しく評価し、判断する科学であり、結論については「説明責任」を伴う。さらに、事後検証が必要であり、予測に誤りがあった場合には直ちに修正をする勇気を持たなければならない。

「評価科学」は、すべての薬剤師にとって、業務上必要な究極の能力であり、薬剤師生涯学習の最終目標といえる。医療・保健・福祉の場での、医薬品の使用に伴う薬剤師のあらゆる専門業務に関しては勿論のこと、医薬品の開発、医薬品の審査や監視、さらには薬剤師の生涯研修の企画、実施、評価・認証に関しても、正しく発揮しなければならない必須の能力なのである。

そして、そこで得られるものが、大切な『信頼』であると確信する。

(2009.5.28)